

マルチメディア時代の通訳訓練
— CALL システムの導入とその有効活用について —

田中 深雪
(立教大学)

With the rapid evolution of information technology, the introduction of various media tools into educational scenes in Japan is now in progress. In line with this trend, "Computer Assisted Language Learning (CALL)" facilities equipped with advanced technologies are taking over Language Laboratories at many universities and colleges. However, despite the expensive investment made, many teachers find it difficult to incorporate CALL into their language teaching. Especially in the field of teaching "interpreting" the introduction of CALL is quite new and the pedagogy making full use of the system is far from being established. This paper first reports an "interpreting" class taught under CALL environment at a university in Japan. It then discusses some of the critical issues that need to be addressed when using the system. The paper suggests that the role of teachers as well as support of administrators is crucial in making most of the advanced technologies.

1 はじめに

急速に進むIT技術の発展の中、教育現場でもコンピュータを含む各種メディア機器の導入が全国規模で進んでいる。平成17年に文部科学省が実施した、学校における情報教育の実態等に関する調査¹⁾によると、1999年には生徒10.3人に1台の割合でしか設置されていなかった教育用コンピュータは、今日では5.5人に1台となり、巾広く利用されている。また学校におけるインターネットおよびLANの整備も進み、現在、高校でのインターネット接続率は100%にまで達している。

その流れは大学の語学教育の場にも波及し、教材・教育機器へのIT化が急ピッチで進んでいる。これまで長年に渡って利用されてきたLL(Language Laboratory)教室

TANAKA Miyuki, "Interpreter Training in the Age of Multimedia -- CALL and its Effective Use."

Interpretation Studies, No. 6, December 2006, Pages 183-196.

(c) 2006 by the Japan Association for Interpretation Studies

が次々に取り壊され、それに代わって最先端のテクノロジーが活用できる CALL (Computer Assisted Language Learning) 教室が続々と新設されている。平成 13 年の大学英語教育学会の調査によると、大学における CALL の設置率は 44%程度で、おそらく現在では、さらに増加の一途を辿っているとみられる (神田 2006)。

しかし、このような変化は教育現場では必ずしも歓迎されているとは言い難い。というよりも、むしろ混乱さえ招いているのが現状である。最先端の機能を持つ高価な CALL が導入されたものの、それをどのように使えばよいのか、また一体何に利用すればよいのか。CALL を利用した新たな授業の枠組みづくりが確立されているとは到底言えないのが現状であろう。

また、教員のコンピュータリテラシーの問題もある。先述の調査によるとコンピュータを操作できる教員の割合は、93.6%にも達してはいるのだが、実際にコンピュータを使って指導できる教員の割合となると、その半分以下の 46.1% (高校) にまで減ってしまう。

複雑な PC 操作を含む CALL 機の運用方法を習得するのは、必ずしも容易ではない。しかし、文字や音声だけでなく、映像メディアなども手軽に編集して使うことができ、さらに多様な情報メディアに容易にアクセスできる CALL を導入することは、これからの通訳教育にとってもメリットが大きいはずである。

そこで本稿では、筆者の大学での通訳クラスでの CALL 使用例を紹介するとともに、CALL システムの導入により従来の語学や通訳訓練の授業形態がどう変化したのか、またそれがいかなる効果や弊害をもたらしているのかという点を概観し、今後の CALL システムの有効活用に向けての具体的な展望を検討する。

2 CALL システムとは

CALL とは Computer Assisted Language Learning の略称で、「コンピュータ支援言語学習」を意味する。最近では “CALL means learners learning language in any context with, through, and around computer technologies.” (Egbert, 2005) として、コンピュータ技術を利用した幅広い分野での語学学習全般を指し示す形で用いられることが多くなってきている。

CALL では、文字、画像、音声といった複数のメディアを統合的に扱うことができる。もちろん従来の LL でも教材提示装置、カセット、ビデオなど複数のメディアを扱うことはできたが、これらは別々の機器に分かれていたため、各機器をそれぞれ操作しなければならないという手間が必要であった。しかし CALL の場合は、文字、画像、音声もすべてデジタル化して取り込み、コントロールパネル一つですべてを制御できるよう設計されている。このように、マルチメディアを便利に使える語学学習環境を提供してくれるのが、CALL の主な特徴であろう。

さらに CALL においては各学生が個人の環境を持ち、個別に学習履歴を残すことが

できるため、クラス全体で同じ教材を一斉に学習する方法だけでなく、自分のペースで個別に学習を進めることができるなどのメリットもある。

3 CALL 環境下での通訳訓練

3.1 CALL 機の導入

昨年実施された「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」(染谷他 2005)の結果を見ると、通訳の授業で主に使われている教室のタイプは LL 教室が 35%、同時通訳室または国際会議室が少なくとも 19%あったのに対し、CALL 教室は 16%でしかない。

この結果からも明らかなように、大学での通訳の授業は主に LL 教室や通訳用の同時通訳室などを利用して行われるのが一般的であろう。筆者の勤める大学でも、これまでは専用の同時通訳ブースが備わった教室や LL 教室を利用して授業を行ってきた。

しかし、同大学で 2005 年度に LL 教室が CALL 教室に改造されたことに伴い、急遽、CALL を利用して授業を行うことになった。授業開始前には大学のメディアスタッフや業者から派遣されたインストラクタによる CALL 機の取り扱い方や、基本的な機械操作のデモンストレーションが行われた。

ただし、時間的制約もあり、操作を一通り教わっただけで、自在に機器を取り扱えるレベルに達する前に授業開始を迎えた。またシラバス作成の際に、CALL を利用した通訳訓練法についての指導方法や指導例を探したが、その数は限られており、一般の語学教育への CALL 導入例を参照せざるを得なかった。

3.2 使用機種とその機能

今回、筆者が使用したのは PC@LL/MT Ver.5.0 (内田洋行) という機種で、デジタルとアナログを融合させたハイブリッドタイプの CALL システムである。この機器にはコントロールパネル上に、オールコール、ペアレッスン、インカム、モニタ、ペアモニタなど、従来の LL 機に備わっていた機能が組み込まれており、概ねこれまでの LL 機と同じような手順で操作することが可能である。

しかし LL 機と大きく異なる点もある。CALL には学生用のテープレコーダが存在しない。その代わりに、ソフトレコーダというソフトウェアがインストールされている。学生は各自のパソコン画面から、SPEAKING、LISTENING、WRITING、SCREEN LESSON、DRILL STUDY など、それぞれが学習する内容のソフトレコーダを選択し使用する仕組みになっている。

そこで今回このソフトレコーダの各機能を使って、シャドーイング、リプロダクション、ミラーイング、訳出や同時通訳など、さまざまな語学や通訳練習などを試みた。

3.3 ソフトレコーダの各機能を使った練習

a) ソフトレコーダ : SPEAKING

SPEAKING は、モデルとなる教材の音声を実際に繰り返し「聞き」「話し」「録音」するためのソフトで、リピーティング、ロールプレイ、シャドーイングなどの練習モードに分かれている。また、モデル音声のイントネーションを表すピッチ表示、スピードコントロール機能、繰り返し再生など多くの機能が組み込まれており、指導目的に応じて適宜利用することができる（図 1）。

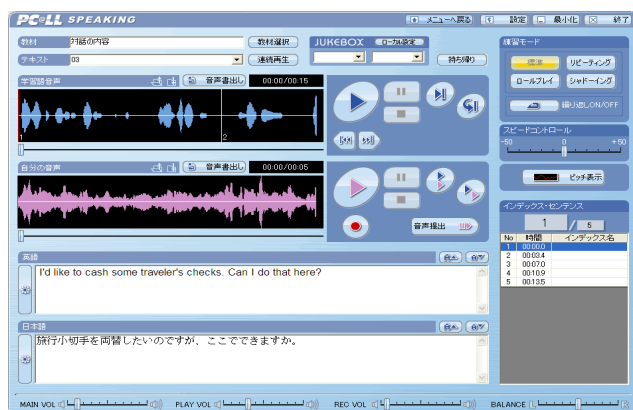


図 1 PC@LL SPEAKING 画面

今回、シャドーイングやリプロダクションなどの練習を行うに際して、このソフトを最も多く利用した。学生は自分の PC 画面上のソフトレコーダを立ち上げ、教員があらかじめ作成しておいた教材ファイルを選択し、それぞれの練習を行う。

まず、英語のイントネーションなどに自信が持てない学生には、音声表示や繰り返し再生機能を使った練習を実施した。次に音の強弱やイントネーションを示すピッチ表示を用いて、モデルと自分で録音した音声との比較も行った。さらにシャドーイング初心者でモデル音声のスピードについていけない者には、プラス 50 からマイナス 50 の範囲内で音声の速さを変換できるスピードコントロール機能の利用を許可した。

概して CALL 機は LL 機と比べると音質が良く、微妙な音の連結や同化までもクリアな音で聞くことができるので、発音やリスニング、ディクテーションなどの練習に適しているとの印象を持った。

b) ソフトレコーダ : WRITING

WRITING は、複数の者がネットワーク上に用意された一箇所に参加し、テキストを入力してリアルタイムに会話を行うという、いわゆるチャット機能を持ったソフトである。クラス全員で、あるいは指定されたグループ単位やペアでチャットを行うことができる仕組みになっている。また文字入力だけでなく、キーボード入力した文字を合成音声で読み上げることも可能である。かなり長い文をクラス全員でほぼ同時に送信させても機器の動作は安定しており、使用に支障はなかった。

そこでこの機能を利用して、サマライジングや速訳などの練習を試みた。サマライジングの練習では学生に英語の音声教材を聞き取らせ、その内容を英文のまま、あるいは和文に訳して大意を要約させ、答えをキーボードから入力させた。学生は自分の答えがすぐさまクラス全員の目に触れるということを意識してか、従来のように用紙に答えを書かせて回収した場合とくらべ、誤答やスペリングエラーなどが少なく、ほどよい緊張感を保つことができた。

速訳の練習の際は、あらかじめ学生がキーボードに打ち込む時間を制限し、訳出の速さと正確さを競わせた。またチャット本来の機能を利用して、互いの訳文について画面上でレスポンスするよう指示してみたところ、学生間で活発なやり取りが行われ、とかく孤立しがちな CALL 環境下にあって、学生間の交流を図ることができたように思う。

c) ソフトレコーダ：SCREEN LESSON

SCREEN LESSON は、動画を見ながら音声や文章による回答を行うためのソフトである。これには動画配信、動画レッスンそれにアフレコと3つの機能が備わっており、この動画配信機能を使って DVD や VHS などの動画を学生の PC に配信して使う仕組みになっている。一度配信されたコンテンツは学生側に保存され、学生はそれを使用して練習する。

この機能を利用して、まずミラーイング練習を行った（田中 2006）。ミラーイングとは語学訓練法の一つで、“repeating simultaneously with a speaker while imitating all the speakers’ gestures, eye movements, and body posturing.” (Celce-Murcia, 1996) とあるように、シャドーイングのように話し手の音声だけでなく、ジェスチャーや視線の動き、体勢までもできるだけ正確に真似ながら同時に発話していく練習法である。語学学習においては、言語だけでなくジェスチャーなど、非言語についての知識も必要であり、通訳教育においてもこれを無視するわけにはいかない（稲生・染谷 2005）。

CALL 導入以前は1台のテレビモニタを使い、クラス一斉方式でミラーイング練習を実施したこともあった。しかしこの方法では画面の見落としや、モデル音声が届かぬなど限界があった。だが CALL の場合、一度 DVD や VHS から映画の一場面を SCREEN LESSON に取り入れておけば、学生たちは自分のペースで再生・巻き戻し・静止・録音など繰り返し練習できる。

また、この SCREEN LESSON はミラーイングだけでなく、通訳練習にも頻繁に利用した。NHK や民放各局、CNN、ABC、CBS、BBC など放送されるさまざまな報道番組などを随時取り込み、教材として利用した。学生たちは毎回、自分の語学能力に応じて教材を選択し、リスニング、ボイスオーバーの練習、それに逐次通訳や同時通訳の練習を行った。

d) ソフトレコーダ：SPEAKING と PC 機能を併用した練習

CALL 機の特徴の一つは、前述のソフトレコーダとパソコン機能の同時併用が可能

な点である。教室内は常時インターネットへのアクセスが可能なので、学生にソフトレコーダ SPEAKING と WEB 画面を同時に立ち上げた形で利用させた。

一例を挙げると、VOA Special English²⁾ などインターネット配信されているニュースをそのまま音声教材として利用し、まず学生たちに時事英語のリスニング、ディクテーション、また英日の訳出練習をさせた。次にソフトレコーダ SPEAKING を使って、訳や書き取った答えを録音させ、提出させた。最後に、放送番組のトランスクリプトを WEB で参照させ、フィードバックも行った。

言うまでもないが、このような時事ニュースなどを訳させる場合、それが書かれた文化的な背景知識がないと的確な訳出は難しい。Olk (2003) は、“Insufficient cultural knowledge may not be the most central problem in translation activities, but it certainly poses a very real threat to the comprehension of source texts and the production of acceptable translations.” として、テキスト理解と翻訳における文化的知識の重要性を述べているが、それは通訳においても同様である。

そこで授業では WEB を利用し、できるだけ授業で取り扱う分野の背景知識(政治、経済、地理、文化などを含む)、専門用語を学生自身で検索、資料収集させた。またオンライン辞書(英和、和英、英英、フリー百科事典)などを使った単語や語句のリスト作成、ソフトレコーダを用いたクイックレスポンス練習などメディアを複合的に使う形で対応した。

しかし、このような授業展開には若干問題もあった。少数ではあるが学生の中にはパソコン操作にまだ十分習熟していない者もおり、教員やスタッフによるサポートが必要な場合もあった。CALL を使った授業では教員はもちろん、学生のメディアリテラシーのレベルも授業運営に大きく関係すると言える。

4 学生の反応

4.1 アンケート調査の結果

CALL を利用した通訳練習に対して、受講した学生 20 名がどのような感想や意見を持ったのかを探るため、最終授業後に無記名でアンケート調査を行った。結果は以下の通りである。

CALL 機を使用することになんらかの不安を感じたか

毎回不安を感じた	5%
時々、不安を感じた	10%
ほとんど不安を感じなかった	85%
その他	0%

初回のベンダーによる CALL 操作の説明会は役に立ったか

役に立った	80%
少し役に立った	15%
あまり役に立たなかった	0%
その他（欠席した）	5%

CALL 機利用のメリットは何だと思うか？（複数回答）

繰り返し音声教材を聞ける点	75%
録音のやり直しが容易な点	65%
スピードの調整ができる点	35%
音声波形を見ることができる点	25%
メリットは無い	0%
その他（分からない）	10%

CALL 機利用のデメリットは何だと思うか？

個人学習になってしまう	20%
練習が単調になってしまう	10%
機械操作が難しい	5%
デメリットは無い	60%
その他（分からない）	5%

4.2 調査分析

アンケート調査、およびその後行った自由記述式の結果からまず判明したことは、パソコン操作そのものに習熟していない学生たちは、CALL 教室での授業に少なからず不安を感じたという点である。逆にパソコン操作に自信を持つ学生や、これまで CALL を使用した経験がある学生たちは、ほとんど不安を感じることなく授業に取り組むことができた。

しかし、さらに詳しく尋ねてみると、たとえ PC 操作に慣れている学生であっても音声ファイルの作成や提出手順、それに音声教材持ち帰りの際の操作手順など、CALL 特有の機器操作についてはよく分からず、不安を感じたという意見が多かった。

次に CALL 機のメリットに関しては、リピート機能やスピード調整機能などを使うことによって、これまでとは違って自分のペースで通訳や語学学習を進めることができる点がよかったと述べる者が多かった。

一方、CALL 機利用のデメリットに関しては、授業というより個人学習化してしまう点と、練習が単調になる点を挙げる学生が多かった。また画面の突然のフリーズ、PC の誤作動や接触不良など、コンピュータに対する不信感や、修復にかかる時間が長いことに対して、少なからず苛立ちを感じたという学生もいた。しかしクラス全体

としては大半が CALL を使用した通訳法の授業に関して好感を表明し、その継続を望む者がほとんどであった。

5 考察

5.1 教員から見た CALL の長所、短所

a) 個別学習化について

これまで見てきたように、大学での CALL の導入によって従来の通訳や語学指導環境に少なからず変化が生じた。中でも特に顕著なのは、授業形態の変化に伴うクラス運営方法の変化であった。従来、普通教室や LL 教室でシャドーイングやリプロダクションなどの練習を行う場合、クラス全員が同じ教材を、同じスピード、同じ回数聞いて練習するという一斉形式でしか実施できなかった。そのため授業についていくことができない学生や、反対にやさしすぎて退屈する学生がいても対処できずにいた。

しかし CALL 機の導入により、学生たちは各自の語学習熟度に応じて、同じ授業時間中に難易度が異なる音声教材を選択し、しかも再生スピードを自在に変化させ、いわば個別形式で学習を行うことができるようになった。学生の語学習熟度によって到達目標が異なる場合にはこれはメリットであり、学生たちの授業の進度やレベルについての不満を和らげることができる。

一方、CALL を利用することにより、本来の「授業」というよりもあたかもクラスでそれぞれが「自習」を行っているようになってしまった面もある。学生の中には、自習なら何も全員が教室に会して授業時間を使ってまで行う必要もないし、むしろ自宅学習で十分なのではないのかといった考えを示す者もあり、教授方法や担当教員の役目について、改めて問い直す必要性が生じた。

b) CALL 用教材に関して

CALL には、教員が自分で教材を作る必要がないように、あらかじめコースウェアのような教材コンテンツが用意されている。しかし、現在日本で販売されているコンテンツは自習用の教材が多く、授業で使えるものが少ない（神田 2006）。また教材は学生のやる気を起こし、彼らのニーズに応えるものでなければならないはずだが、適切なものをみつけるのは容易ではない。

今回 CALL で通訳訓練を実施するにあたって、すでに市販されているソフトを調べたが、一般の英語会話や語学検定試験準備などの語学練習用や自習用のものが多く、通訳トレーニングに適していると思えるものを見つけることはできなかった。そのため、教材は毎回自分で作成せざるを得なかった。

これまで LL 教室や一般の教室で通訳訓練を行う場合は、使用するカセットテープや CD などを教室に持ち込みさえすれば、そのまま利用することができた。CALL 機でも、LL 機能だけを使用する場合はカセットテープなどアナログ教材をそのまま使うこともできるが、ソフトレコーダなどの機能をフルに活用して使う場合は教材作成

用ソフトを使い、アナログ教材を一度取り込んでデジタル変換させなければならない。

この教材作成用ソフトには、自動インデックス作成、インデックス対応テキスト入力、音声編集（カット・トリミング・挿入）、リピーティング教材作成、ロールプレイ教材作成、ドリルスタディ教材作成、スクリーンレッスン教材作成などさまざまな機能がある。教員は自分の指導目的に応じて適宜、機能を選択して教材を作成する。

CALL 導入初年度は教材作成に追われることになるが、いったん教材を作成し、それを音声ファイルや動画ファイルとして保存しておくで改めて作成する必要はない。また、何度使っても音や映像が劣化することがない点などは CALL の長所ともいえよう。さらに、その時々ニュースや話題になったトピックスなど、真新しい素材をリアルタイムで教材にすることができる点は、時事英語を多く使う通訳訓練にとって大きなメリットであった。

一方、教材作成のためのマニュアルはあるものの、初めて CALL 機に接する者には自分一人で教材を作るというのは必ずしも容易ではなかった。また録音音声のカットや、インデックス作成など細かい手作業は、手順を一つ間違えるとやり直しを余儀なくされる。機械操作に不慣れなうちは、1 回の授業に使う教材を作成するのに数時間を要することもあった。

c) フィードバックに関して

語学学習において教員やクラスメートからのフィードバックは欠かすことができないが、通訳訓練の場合は特に重要である。CALL 機を使わずとも、パフォーマンスのフィードバックは可能であるが、CALL を使えばより詳細なフィードバックも容易にできる。

たとえば、これまでは学生が音声を録音提出する場合、カセットテープを用いて行っていたが、音質がよくない、音がすぐに劣化してしまうなどの問題があった。また回収したカセットテープの保管や持ち帰り、処分などにも手間が掛かった。

しかし CALL の場合、録音音声は WMA データ形式で教員機のフォルダに集約される。USB フラッシュメモリー1 本あれば、かなりの量のデータを管理できる。このように、教員にとっても音声の保存・提出・回収をすべて音声ファイルで行う CALL は、使用方法を一度マスターしてしまえば至って便利である。

さらに、逐次通訳やパブリックスピーチなど学生のパフォーマンスをビデオ撮影した場合でも、一度ソフトレコーダ SCREEN LESSON に取り込んでおけば、学生が自分の PC 上で自由に視聴できる。このように CALL 導入によって、フィードバックに用いる学生のデータを簡単に集め、保存、管理することができるようになったのはメリットであろう。

しかし、これにも問題がないわけではない。通訳の場合、一般の語学学習と違って多角的に評価を行う必要があるため、その評価基準や方法が確立し難い面がある。そのためフィードバックや評価に関しては、せめて "a guideline to which instructors can

refer to when seeking how to teach and/or to give feedback to students.” (Tanaka & Tsuruta, 2001) とあるように、ガイドラインがあればよいのだが、現状は各教員に評価判断は委ねられている。どう評価すればよいのかを考えつつ、膨大な量の音声データを教員が一人でモニタしていくのはかなりの時間とエネルギーを要する作業である。

すでに音声学や一般の語学学習の分野においては、発音やイントネーションなどをモニタするソフトが多数あり (e.g. “WASP and PRAAT are freely downloadable, while other pedagogically oriented programs such as VisiPitch and SpeechViewer are commercially available.” (Lewis & Pickering, 2004))、中には発音の良否や語法のチェックなども機械が自動的に判定を下すものもある。

しかし、「通訳パフォーマンス」の良し悪しを自動的に判定するソフトは現時点では存在しない。また将来的にそのようなソフトが開発されることも考えにくい。やはり今後も学生のパフォーマンスを一つずつモニタするという極めてアナログな形で、地道にフィードバックを続けていくしかない。

6 CALL の有効活用を目指して

6.1 授業運営とサポート

最後に、今後 CALL を使って語学や通訳の授業をより有効な形で運営していく上で教員の果たす役割は何なのか、考えてみたい。Jones (2001) は “He or she would have to provide assistance in a number of ways: relating units of the program to a taught syllabus and/or to the individual learner’s special needs; identifying the right level for the learner, and possibly helping to select tasks.” と述べ、教員は学生一人一人の特別なニーズに合わせてシラバスと練習を関連付け、あるいは教材を選択する際のアドバイスを与えるなど、機械ではカバーできない重要なポイントを担うべきであるとしている。

さらに当然のことながら、教員にとってもパソコンや CALL 操作に精通すること (“mastering the relevant computer applications” (Kern, 2006)) は必須条件である。今後、語学教員にとっても、教育に活用するコンピュータリテラシーは必須となり、教職課程においても CALL が履修科目となることが予想されている (小林・生田 2001)。しかし、まだまだコンピュータを使っての授業は苦手だと感じる教員の数は、かなりの数に上るであろう。それゆえ授業をスムーズに運営していくためには、大学のメディアスタッフや業者からのサポートは欠かせない。

サイトラや同通など各種の通訳トレーニングを行う時は、一般の語学練習とは少し異なった形で CALL 機の設定を変えていかなければならない場面が生じてくる。そのような場合、担当教員の方からメディアスタッフや業者に具体的にどのようなことを行いたいのか、機器の機能をどう変えてほしいのかを詳細に説明することが必要であ

る。またプログラミング修正に関しても、できるだけ対処してもらえよう体制を構築していくべきであると思う。

また、通訳学習は相当な量の練習を必要とするので、限られた授業時間だけでは到底上達は見込めない。そこで教室の中での学習と自宅学習との連携が大切になってくる。学生が自発的に、しかも効率良く学習を継続して行くには、教材の持ち帰りの許可、自習環境の整備、学生を対象とするサポートシステムの構築など、周辺の学習環境の態勢を整える必要もある。

教員が大学のサポートと緊密に連絡を取り合い、連携を組む体制ができれば、CALLをより有効に活用することができるようになる。もしその連携が十分に充実しなければ、恐らくCALLシステムを最大限に活用することは不可能であろう。今後は教員、学生、機器、大学のサポートとの連携による新しいパラダイムの中で授業運営を構築していくことがCALLの有効活用には必須である。

6.2 今後の課題

現在、日本の大学の教育現場では、語学学習授業の適正サイズといわれる15名程度を超えた大人数のクラス設定がなされているケースが多い。さらに、学力の異なる学生が一堂に会していることも珍しくない。このような実情を考えると、たとえ大人数でも、また学生の語学学習熟度が多様であってもきめの細かい指導を提供できるCALL環境下での語学や通訳指導は、増加していくことが予想される。

もはや時代は、“[...] is not the technology per se that is effective or ineffective but the particular ways in which the technology is used.” (Kern, 2006) とあるように、CALLが有効かどうかという点ではなく、どのようにしてこの新しいテクノロジーを使いこなしていくかということがより重要になってきている。

今後CALLをさらに多くの語学や通訳教育現場で有効に活用していくためには、検討すべき課題が多く残されているのも事実である。CALLの特性を生かした教材の開発、その作成方法、コンテンツの蓄積、指導方法、評価基準や方法などは今後真剣に取り組んで行かなければならない問題である。また教員も、“Teachers are therefore important in guiding learners towards the options that may be more beneficial to them based on their proficiency level.” (Hegelheimer & Tower, 2004) というように学生の語学レベルを考慮して、どうCALLを利用すればよいのか、またどのようなことが可能なのか、学生たちを導いていく必要もある。

これまで長い間、通訳技術は教員が一人一人の学生を手取り足取り世話しながらダイレクトに指導することで、次世代へと継承されてきた。人と人とのコミュニケーションをはかるといって極めて人間的な通訳という作業は、一見、IT技術とは相容れないように思われがちである。しかし、語学教育におけるマルチメディア時代の到来とともに時代は急速にシフトしてきている。これからは通訳教育においてもコンピュータ

の機能を有効活用しながら、教育的な価値を高め、学生の思考や能力を増幅できるコミュニケーション媒体としてのCALL学習環境を整えて行かなければならないだろう。

しかし、忘れてならないのは、たとえCALLが導入されてもコンピュータが教員に代わり得るということは決してないという点である。通訳や語学教育においては、人間の力は欠かすことができない。今後は、これまでの極めて人間的な通訳訓練の手法の良さを失うことなく、さらにIT技術の力を借りることによって、よりよい形での指導ができるよう、研究・研鑽を重ねる必要があるだろう。

著者紹介：田中 深雪 (Tanaka Miyuki) 立教大学観光学部兼任講師。コロンビア大学ティチャーズ・カレッジ修士課程修了（英語科教授法専攻）。日本通訳学会理事。主な論文・著作に「通訳訓練法を利用した大学での英語教育の実際と問題点」『通訳研究』第4号(2004)、『英語リスニングの「基礎トレ」』（講談社インターナショナル）などがある。Email: 504170@rikkyo.ac.jp

【註】

- 1) 学校における情報教育の実態等に関する調査 (平成17年度) — 学校教育および教育行政のために地方公共団体において整備された教育用情報機器およびソフトウェアのほか、学校のインターネット接続環境、教員の情報活用能力の実態等の状況を明らかにし、国・地方を通じた教育諸施策を検討・立案するための基礎資料を得る目的で文部科学省が実施した調査。インターネットへの接続状況、ソフトウェア整備の実態等、コンピュータ整備の実態等及び教員のコンピュータ活用等の実態を調べた。
- 2) VOA Special English
[Online] <http://www.voanews.com/specialenglish/index.cfm> (Oct. 2, 2006)

【参考文献】

- Celce-Murcia, M., Brinton, D., Goodwin, J. (1996). *Teaching Pronunciation: A Reference for Teachers of English to Speakers of Other Languages*. p.310. Cambridge University Press.
- Egbert, J.L. (2005). Conducting research on CALL. In J.L. Egbert & G.M. Petrie (Eds.), *CALL research perspectives*. pp.3-8. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Hegelheimer, V. & Tower, D. (2003). Using CALL in the classroom: Analyzing student interactions in an authentic classroom. *SYSTEM* 32, 185-205.
- Jones, F. J. (2001). CALL and the responsibilities of teachers and administrators. *ELT Journal* 55: 4. 360-367.
- Kern, R. (2006). Perspectives on Technology in learning and Teaching Languages.

- TESOL Quarterly* 40:1 183-209.
- Kormos, J., & Denes, M. (2004). Exploring measures and perceptions of fluency in the speech of second language learners. *SYSTEM* 32, 145-164.
- Lewis, J., & Pickering, L. (2004). Teaching intonation in discourse using speech visualization technology. *SYSTEM* 32,505-524.
- Olk, H. (2003). Cultural knowledge in translation. *ELT Journal* 57:2. 167-174.
- Tanaka, M., & Tsuruta, C. (2001). Teaching Language through Interpretation Training *JALT Conference Proceedings, 2001*: 144-148.
- 稲生衣代・染谷泰正 (2005) 「通訳教育の新しいパラダイムー異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論ー」『通訳研究』第5号：73-109.
- 神田明延(2006)「CALL 導入と運用」国際語学社
- 小林ひろみ・生田祐子(2001)「CALL を利用した語学教育の動向」
[Online] http://www.juce.jp/LINK/journal/0103/06_01.html (2006/07/01)
- 染谷泰正・斉藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代 (2005) 「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第5号：285-310.
- 田中深雪(2004)「通訳訓練法を利用した大学での英語教育の実際と問題点」
『通訳研究』第4号: 63-82. 日本通訳学会
- 田中深雪(2006)「映画を利用したシャドーイングとミラーイング」
『映画英語教育学会』2006年第12回大会要項 p. 14

